

高井一の

# 中部に活!

インタビュー 高井 一 (東海テレビアナウンサー)

名古屋工業大学大学院准教授  
有限会社タイプ・エービー主宰

## 伊藤 孝紀 氏



## 小さなことを継続して生まれるムーブメントが街づくりを楽しくし、実現へと向かわせる

豊かな自然環境の中、  
「モノの見方」を学んだ子供時代

**高井** 三重県の上げ馬神事で有名な多度大社のある多度町のご出身ですね。馬に乗って駆け上がったお一人ですか。

**伊藤** まさに多度大社の真横に家があったのですが、勇気と根性がなく、経験できませんでした。

山の中に入ってイタドリ（タデ科の多年生植物）を取って食べ、虫を捕まえ、無謀が過ぎて転げ落ちる、あるいは田畑を荒らして怒られる、というようなことはしょっちゅうしていたのですが（笑）。

**高井** 多度町というのは、とても大きな町ですが、自然が豊かなところで、のびのび育ったということですね。ところで現在、名古屋工業大学の建築・デザイン工学科の准教授と建築設計・デザイン事

務所の主宰という2つの顔を持って活動されているわけですが、デザインの道を歩まれるきっかけは、子供時代にあったのでしょうか。

**伊藤** 1974年の生まれですが、おっしゃるとおり、多度町には子供が思う存分遊ぶには格好の環境があり、そこで過ごせたことがとても大きかったと思います。今、取り組んでいるまちづくりにおいて、郷土への愛や心象風景までデザインしていきたいと考えているのも、おそらくその辺りからきているのでしょう。

それと、身近で大きな影響を与えてくれた人が、名古屋市立大学の薬学部長だった祖父です。凛として格好よく、科学や数学などの勉強は全く教えてもらえなかったのですが、ものの見方については厳しくて、例えば、小学校1、2年の夏休みの宿題だった水族館づくり。お菓子の箱に図鑑を見ながら描いた魚を吊り、ビニールなどで海藻をつくってといった同級生の作品が並ぶなか、僕一人、車で運ばないと持っていけないくらいの超巨大作品でした。どうしてそうなってしまったのかというと、魚を描いていると、祖父が横から「お前は間違っている。魚というのは立体だろう？泳ぎが速い魚は形に特徴があるんだ。流線形だ。鱗とかも一枚ずつよく見ろ、観察しろ。」と言うわけです。そこから「じゃあ流線形ってどうやって作るんだ？」ということになり、中に綿などを入れて立体にして、鱗も一枚一枚貼っていく。写生で山の風景を描くときも同じです。まだ小学校低学年ですから緑色一色で塗るでしょう？すると、またまた「バカか、お前。木が一本ずつ重なって山だ。木もよく見ろ。葉っぱも一枚ずつ違うだろう？」とね。

**高井** 自然科学の原点ですね。それは、大作にならざるをえないな（笑）。

## 社会に目が向いた 17歳の転機

**高井** では、やはりそういった子供時代の延長のようなかたちで、大学で建築・デザイン工学を専

攻されたのですか。

**伊藤** いいえ、高校の時に思い描いていたのは、そんな具体的なことじゃなかったんです。家族が医学・薬学系のなか、「医者になれ」と言われたりすることに対する反抗心もあって、「東京の大学に行って、楽しくできればいいな」といった程度にしか思っていなかったんです。そんな中、大きな転機がありました。17歳の時、大事故にあったのです。

**高井** 伊藤先生がですか。

**伊藤** ええ。スキーの帰り道でした。雨の中央道で、乗せてもらっていた車がハイドロプレーニング現象を起こしてひっくり返ってしまったのです。単独事故でした。ぐるぐる回転して、車の屋根が飛んでしまい、僕は頭部を激しく強打して、4日間昏睡状態で生死をさまよいました。今、前頭葉の前半分は人工骨です。頭蓋骨に人工骨を入れるというのは、ほとんど症例がありません。僕は非常に運が良かったんですね。長野の山の中で交通事故にあったにもかかわらず、すぐ近くに総合病院があり、たまたま当直していたのが脳外科のプロフェッショナルだったのです。処置が早かったので重い後遺症が残らなかったのです。

**高井** まさに九死に一生を得たわけですね。

**伊藤** ええ、不幸中の幸いといえば、まさしくそうなのですが、人の気持ちというのはそう単純なものではありません。大学受験に向けて馬力をかけていこうと思っていた矢先ですから、「なんで僕だけこうなっちゃったんだろう。」という気持ちのまま長野でポツンと一人入院生活の状態が続き、なかなかその状態を受け入れることが難しく、「これは人生終わったな」と感じていました。

**高井** そこからどうやって気持ちを切り替えられたのですか。

**伊藤** 同じ病棟に、僕と同じように交通事故で入院していた同世代の女の子がいました。ある日、僕が「こんにちは」と声をかけたのですが返答がない。気に入られていないのかなと思っていたら、彼女の車いすを押しているおばあさんが「この子も1週間前まであなたみたいに元気だったのだけ

れど、今は何も感じない、何も話せないの。」と言いました。その時に初めて、「僕は生きている、感じることもできる。生きているのなら、何か人のため、社会のためにできることをやろう。僕はそれをやるために生きているんだな。」と心の底から実感したのです。何かを悟ったといった格好のいいことではなく、たぶん、そう思わないと前に一步も進めなかった。17歳なりに、当時いろいろな言葉をノートに書いて自分に問いかけたんです。そのなかで、やはり子供のころの素地というか、祖父に工作や美術を教えてもらっていた影響もありますが、社会や環境、街を対象にできる学問と考え、今の道に進み、その想いを実現しようと思ったのです。

## 自称「プレゼンマニア」として

**高井** 大学在学中に起業されましたね。社会のために何かしたいというエネルギーゆえのことですか。

**伊藤** そんな格好いいものではありません。何かやりたいと思っても、若造ですからね。思いだけはあっても何をしたいかわからないし、時々「僕はいったい何のために存在しているのか？」という後ろ向きの思いも顔を出す。そんな負のエネルギーを払拭すべく、何か前向きなエネルギーに表現していこうと思ったのです。一方で、事故でいろいろな既成概念が吹っ飛んでいますから、日常のいろいろなことを疑問に思うのです。今までならすんなり見過ごしていたことが見過ごせない。常識だと思っていたことに「？」がつく。「道路がこんな豊かでない空間でどうなんだ？」とか、地下鉄に乗っても「こんな息苦しくていいのか？」と思うと、それを誰かに伝えないと行かない。当時から自分で「プレゼンマニア」と呼んでいたのですが、提案書をつくっては市長や企業に送ったり、持っていったりしていたのです。

**高井** 起業は、そのための事務所といったようなものだったわけですね。

**伊藤** ええ。この話をするとよく、「学業はそっ

ちのけでそういった活動が主だったのですか？」と聞かれるのですが、そうではありません。講義のすべてをまじめに受けていたかという「はい」とは言えません。しかし、建築の設計やデザインの実務を学ばなければ、想いを形にすることはできないと考えていたので、名古屋で活躍されている建築家の先生のところに、無報酬でいいから学ばせてほしいとお願いして、週に1、2日はそこで働きながら学ばせていただき、それ以外は大学へ行き、朝夕に自分の活動をするという毎日でした。今は、大学で准教授を務めながらやっているわけですが、実のところ、当時やっていたことと、今やっていることにほとんど変わりはありません。要は、「想いを形にしていこう」ということをやり続けてきただけです。変わったことといえば、最近は肩書と経験がついてきたので、少し実現しやすくなってきたことかな（笑）。

## 「優れた知見」と「ビジネスやまちづくり」を結ぶ

**高井** 「実現」できるようになったというのが、非常に意味あることだと思うのですが、大学の研究室と事務所の活動領域をうまくリンクさせて、実現に導いておられるということでしょうか。

**伊藤** 当時と今とやっていることに変わりはないと言いましたが、もう少し正確に言うと、社会を取り巻く環境は刻々と変化しますから、求められる役割も、時代に合わせてやはり変化します。今、例えば企業に「こういうものもいい、環境にいいよ、まちづくりにいいよ。」と提案しても、CSR（企業の社会的責任）ということだけでは、この厳しい経済状況のなかで予算をつけたり、新しい開発に人員を割いたりすることが難しい。新しいことをやるというのは、製品にしても空間にしても確実に安全安心なものであるという段階ではありませんから、使い手の動作や印象の評価、意識の調査などをやらなければいけません。そういった時に、大学の研究室が社会実験、実証実験という形で参画し、ビジネスや事業になるまでの間を



お手伝いする。そして、そういった知見をビジネスに還元しながら成長させていく。最初の段階は研究実験でいいのですが、その次の段階では、少し具体的に製品にしたり商品化したりしていかななくてはいけない。そういった時のけん引役を私の事務所が務めるといった感じです。

もう一つ言うと、大学というのは、皆さんがとても素晴らしい研究をされているのです。しかし、研究した知見は学会で発表して終わってしまったり、あるいは、行政の委員会で提言はするけれど報告書にまとめて終わりということがやはり多い。研究の知見をビジネスやまちづくりにどう落とし込んでいくか。その最初の火付け役とけん引役を誰かがやらないといけない。研究とビジネスやまちづくりを結ぶ役割を、私の事務所ですら担いたいとの思いで活動しているのです。

## 「環境演出」という まちづくり手法

**高井** それで、具体的にはどのようなことなのかをお聞きしていきたいです。先生の活動は、ビジネスのお手伝いということもありますが、おもには「まちづくり」という視点で、とくに「環境演出」ということに取り組んでおられると伺っています。

**伊藤** ええ、私が20歳から続けているまちづくりの手法は、環境を演出することだと理論づけています。しかし日本語で「環境」という言葉ほどあまいなものはありません。僕が取り組んでいる

のは、直接的に言うと英語でいうところの「エンバイロメント (environment)」です。社会的・文化的・精神的に作用する「環境」、すなわち建物、人、モノなどとの関係性を言うのです。ただ、日本人が環境と言っただけに思い浮かぶ自然環境や生態学における「環境」は「エコロジー (ecology)」であり、「サラウンディング (surroundings)」という周辺環境を意味します。これらを日本語にするとみんな「環境」になり、ざくっと見るだけで、4つ5つの「環境」という英語の意味が一つの日本語の「環境」に含まれているのです。まちづくりにおいて、どれも重要であることは言うまでもありません。生態学的な視点も必要であり、たとえば、今使っている製品が地球の裏側ではどのようにつくられていて、何か地球の裏側の環境を脅かしてくるのではないかとといった視点ももちろん必要です。あるいは建物といったハード、あるいは高速道路といったインフラと人間との関係、それを使う仲間やコミュニティといった人と人との関係性も必要です。一つの側面だけではまちづくりはできません。要は、ひとくくりに環境と捉えるのではなく、さまざまなつながりによって環境がつけられていることを一人ひとりがきちんと知り、そのすべてがまちづくりにおいて重要であることを、そこで生活する人たちの共通認識にしないと行かないのです。

**高井** それでは、そういったことを踏まえて「演出」していくというのは、どういうことでしょうか。

**伊藤** 簡単に言うと、「新しいものをゼロからつくるのではなく、今あるものを活かしてまちをデザインする」ということです。演出の対義語、反対語は創作、創造、建設ですが、もはや、今あるものを破壊して、一からつくる時代ではないでしょう。何千年と文明が続いていて、名古屋だけでも400年続いている。高度経済成長も経験し、ビルが建ち、既存のものがある。そうしたなかでまちづくりを行うには、すでに今あるものをもう一回活かしながらデザインしていくという視点が大事です。もっといえば、あるものの潜在的な価値を見つけ出し、その価値を顕在化させ、より特徴づ

けるための演出が必要なのです。演出の本来の意味は、原作があってその原作をドラマ仕立てにしたり、映画にしたり、ミュージカルにしたりして、視聴率や興行収入を稼ぎながら見る人を楽しませることです。まちづくりでいうと、原作として既存の街があって、そこでどう市民を楽しませることができるのか、企業を儲けさせることができるのか、目的に沿って原作をうまく演出していくことなのです。

### 非常に多面的な利点を持った 「コミュニティサイクル」

**高井** 先生は、主に名古屋で活動されていますから、今のお話から「ああ、あの取り組みが伊藤先生のいう環境演出か。」とピンときた名古屋の方もいらっしゃると思いますが、いくつか具体例を上げていただけますか。

**伊藤** 一つには「コミュニティサイクル」があります。公共交通機関の一つとして、いつでも誰でも利用できる自転車の共同利用の仕組みです。先ほど、まちづくりにおいて考えなければいけない環境というのは多面的だとお話しましたが、まさしくコミュニティサイクルというのは、単に自転車の共同利用サービスということに留まらない、非常に多面的な利点を持った新しい交通手段です。地球環境への配慮や地域コミュニティづくりという視点はもちろん、交通障害や街の景観という点で大いに問題になっている放置自転車を減らすこと、さらに路面のにぎわいの演出にも大いに力を発揮します。名古屋は、地下鉄の利用や地下街の発達などもあって、どうしても地下に潜る人が多いのですが、人々が生き生きと暮らせるまちには、にぎわいというのも重要なポイントで、路面店を感じてもらえる自転車での移動や歩行者の存在が必要です。既存の交通機関と、既存の街並みをより美しく快適にし、より活性化させる一手段として、コミュニティサイクルに着目したわけです。奇しくも2008年の秋に二つの社会実験が名古屋でスタートしています。一つは、「名チャリ」とい

う名称のもと名古屋大学の竹内研究室が大須地区で行ったもの、そしてもう一つは、当研究室が白壁地区で行ったものです。もっとも、両者には予算規模で大きな違いがあり、当研究室は愛知県からの補助があったものの10万円規模で行ったのに対して、竹内研究室は国の予算で大々的に行われ、その後も2009年、2010年と立て続けに実施されましたので、ほとんどの方がそちらをご記憶でしょうね。

**高井** 先生のところは、その後、どうなっているのですか。

**伊藤** よくぞ、聞いてくれました（笑）。実は着々と研究を進めていて、昨年、産学連携で世界初となるマナカなどの電子マネー（交通系ICカード）を用いた決済と個人認証を可能にしたシェアリングのシステムを開発しました。名古屋工業大学内でまず実証実験を行い、いよいよ2012年秋に鶴舞界隈の公共施設や民間地に専用のステーション（駐輪場）を設置して、社会実験を行います。



2011年、名古屋工業大学内で実証実験された  
コミュニティサイクルのステーション風景。

このシステムの開発には、「なごやかさ」というネーミングでビニール傘をシェアリングする仕組みに取り組んだことが活かされています。傘というのは、雨がやむと持って出たことをつい忘れられてしまう、かわいそうな代物です。調べてみると、日本では1年間に1億2千万本の出荷があり、その約7割がビニール傘です。つまり、成人が1年に一人1本ずつ傘を買い替える、というか

捨てているということなんですね。それを何とか食い止め、また、「雨＝地下にもぐる」という構図ではなく、雨でも路面を歩いてにぎわいができるようにしようと考えて、傘のシェアリングの有用性に着目して取り組みました。自転車にしても傘にしても、課題となるのはシェアリングのシステムの構築です。借用・返却の確認が行える個人認証と料金の決済ができる仕組みをどう構築するか。これを模索していくうえで、傘ならばそれほど予算をかけなくても実験ができるし、仕組みを確立できればコミュニティサイクルの実現にも近づくのではないかと考えて、傘のシェアリング実験を始めました。コミュニティサイクルは、ヨーロッパでは実施例がありますが、ほとんどはクレジットカードを使ったものです。クレジットカード文化が普及している欧米ではよくても、日本では大学生でも持っていない人もいるでしょうし、高校生や中学生までと考えると最適ではありません。また、利便性という点では、既存の交通機関との連動性も持たせたい。そこから生み出したのが、世界で初めての電子マネーのみの決済システムというわけです。

**高井** お話を伺っているだけで、その社会実験が待ち遠しいというか、何だか楽しい気分になってきますね。その次の段階も予定されているのでしょうか。

**伊藤** 来年は、民間主体で、栄と名駅（名古屋駅）でも実現したいと考えています。

## 名駅、栄地区での まちづくり社会実験

**高井** 街路灯などに企業が広告を出して、その収益を道路整備や清掃などの地域の魅力づくりに使う社会実験も、先生が関わって進めておられますね。

**伊藤** これも非常に面白いですよ。名駅地区に基盤を置く47社によって構成される「名古屋駅地区街づくり協議会」が中心になって進めています。この協議会の特徴は、大企業どうしが連携してま

ちづくりのプランニングに取り組んでいるところです。その一環として、国土交通省の助成を受けて昨年実施したのが、「持続的な道路PPPの仕組み社会実験」です。PPPとは官民パートナーシップ（public-private partnership）（※1）のことです。従来は、街路の清掃も緑化のメンテナンスも街路灯のバナー広告も、行政が管理しており、申請書を出すなど、行政の許可と予算を使わないとできなかったわけです。それを社会実験によって、街路灯に民間広告を掲示して、得られる収益を公益還元として歩道清掃や花壇の維持管理などまちづくりへの環境整備に使うことができるようになりました。社会実験とは、この仕組みのあり方を検討するものなのです。

**高井** 民間広告の掲示においては、景観を醸成するトータルイメージがバラバラにならないように、色調やトーンを統一する方向ですか。

**伊藤** そこは難しいところです。私としては、市全体の統一ばかりではなく、各地区の個性が出せ、主張のできるものにした方がいいと思っています。ガイドラインのつくり方次第だと思いますが、単に規制をするのではなく、地区で決めたコンセプトやロゴマーク、テーマカラーがあるのなら、そのコンセプトに沿った統一感を出す。しかし、規制でしぼりすぎると、面白味も何もないエリアになってしまいますから、こういった地区ごとの活動を演出するためにもマニュアルづくりが重要になります。

**高井** 名駅地区が元気になり、今度は栄地区も巻き返しをとということで、いろいろなことが始まっていますね。街路灯も非常に斬新なものがあって目を引かれます。

**伊藤** 栄ミナミ地区には、「栄ミナミ地域活性化協議会」があり、こちらの構成員は名駅とは真逆で、中小企業で顔の見える地権者の方々です。私

（※1）小さな政府を志向し、「民間にできることは民間に委ねる」という方針により、民間事業者の資金やノウハウを活用して社会資本を整備し、公共サービスの充実を進めていく手法。民間委託、指定管理者制度、PFI、民営化などがある。

はこちらにも関わっており、今は地権者の方々とともに行政の協力を得ながら街路計画のデザインをしています。栄ミナミ地区がすごくいいのは、ハードを変えるだけではなくて、街路の使い方をどうするのか、どういうふうに楽しむのかという、ソフトとハードをどのようにリンクさせていくかに主眼が置かれているところです。地権者の方々は、春は音楽祭、夏は盆踊り、秋は食のNo.1・B級グルメ、そして冬は・・・といったように、音楽があったり、歩行者天国をしたりと、道路や公園というハードを自分たちで演出しながら楽しんでいこうとしています。行政の力を借りなくても、自分たちでお金を出して、人を集めて、告知をして、にぎわいをつくっていくんだという想い、そういう動きや演出ストーリーがあってこそ、街路計画も進むのです。

## 名古屋モデルとしての「駐車場緑化」

**高井** 先生は、この地域のソファやメガネ、アクセサリメーカーと商品開発やブランディングをするなどモノづくりもしていらっしゃいますが、それらも環境演出であり、まちづくりだと捉えていらっしゃるそうですね。

**伊藤** つくっているモノの背景や技術、職人の技が何かということです。単にこの中部圏に工場があるというだけでなく、地域の活性化まで考えながらモノづくりが行われる仕組みまでデザインすることが重要です。わかりやすい例でいうと、陶磁器や美濃和紙、有松絞りとといった地場産業があり、そこで働く職人さんがいて、いい技術を持っている。その技術を活かしながらモノをデザインし、売れる商品を産み出す。既にある技術を活かしながら、新たな産業を育成し、街の活性化につながっていくというのが、私の考えるまちづくりです。

**高井** 「今あるものを活かして」という視点ですね。

**伊藤** ええ。あとは、名古屋市内の駐車場を緑化していこうというプロジェクトにも取り組んでい

ます。駐車場の緑化という話をすると、緑化がメインと受け取られがちですが、そうではなくて、まちづくりへと派生することを意図しています。名古屋における駐車場が占める割合は、都心部である名駅から栄の間の全面積の約10%です。その10%が全部アスファルトなのと緑なのとでは、街を歩いて体感する感じが違います。緑があると、まちの景観が良くなり、ヒートアイランドも緩和されます。また、世界から見た名古屋は自動車産業の街です。自動車の街というアイデンティティがあるのに、環境配慮や交通のためということで単純に自動車を排除してしまうのは、個性を自ら捨ててしまうことになりかねません。欧米にはそうした例もありますが、そうしたものに右に倣えでなく、名古屋式があってもいいだろうと思います。自動車を減らすのはいいけれど、一方で自動車とうまく共存するようなまちづくりを演出したいと思うのです。



ホテルウェスティンナゴヤキャッスルに完成した環境配慮型駐車場「ECO Parking (エコパーキング)」(2011年6月)

## LED開発の地としての「NAGOYAアカリナイト」

**高井** まちづくりイベントのお話を伺いたと思います。当財団（公益財団法人中部圏社会経済研究所）とともに2010年から取り組まれているLEDを用いたイベント「NAGOYAアカリナイト」は、新しい名古屋の冬の風物詩にもなりつつありますね。

**伊藤** 取り組みの始まりは、私から提案すること  
ももちろんありますが、最近では、想いのある方  
がうちに来て、その想いを語ってくれるところか  
らということも多いのです。この「NAGOYAア  
カリナイト」もその一つです。2010年に（公財）  
中部圏社会経済研究所（当時は（財）中部産業・  
地域活性化センター）の代表理事（当時は専務理  
事）が来られ、「LEDを開発した地はどこかご存  
知ですか？」と問いかけられたことから始まりま  
した。私は「四国の日亜化学工業株式会社でしょ  
う。中村教授も有名ですよ。」と答えて、叱ら  
れた（笑）。そもそも基礎技術を実現し、製品開  
発したのは名古屋大学特別教授・名城大学教授の  
赤崎勇先生と豊田合成株式会社だと。つまり、L  
EDの発祥の地は名古屋だと言ってよく、名古屋  
は自動車ばかりに頼っているのではなく、新しい  
産業を育成していかなければいけない。とくに、  
環境の時代だからこそ、LEDの普及にはおおい  
に意義がある。そのためには、まず地元を知って  
もらうことが大事です。LEDが自分たちのまち  
で生まれたという誇りを持ってもらい、次の世代  
を育てていこうと、そのためのイベントも必要だ  
から、企画・デザインを一緒にやってほしいと、  
熱く語られたのです。二つ返事で引き受けました  
ね。

**高井** 忙しいなか、即決されたのは、魅力を感じ  
られたのですね。

**伊藤** ええ。LEDもそうですが、僕にとっても  
う一つの魅力的な要素がありました。代表理事が  
持ってこられた計画の目的に名古屋テレビ塔を含  
む栄地区のまちづくりが含まれていたのです。地  
上波テレビのデジタル放送への移行に伴い、テレ  
ビ塔も電波塔としての役目を終えることで、撤廃  
か継続かの議論がありました。そのテレビ塔を存  
続させたい。そのためには、テレビ塔に電波を発  
信する以外の新しい機能を位置づけ、栄地区のま  
ちづくりに市民、地域団体、企業が一体となって  
取り組みたいと考えたのです。そのためのイベン  
トが「NAGOYAアカリナイト」です。

**高井** 具体的にどのようなイベントなのですか。



名古屋テレビ塔「ハートタワー」

**伊藤** 市民の思いを伝えることでテレビ塔の光が  
ついたり、消えたり、色を変えたりできたら、市  
民のための、市民参加型のテレビ塔になれるの  
ではないか。そういう演出をすることで何か変わっ  
てくるのではないかと考えたのが「ハートタワー」  
です。大切な人に伝えたいありがとうの気持ちを  
メールやツイッターで投稿すると、その想いを受  
け止めたテレビ塔がその想いを光で街中に知らせ  
ます。また、テレビ塔の下では、豊田合成株式会  
社から提供してもらった約3万球のLED電球を  
使ってシャンデリアを作り、その下で音楽イベン  
トやエシカル&フェアトレードファッションショ  
ーを開催しました。ファッションショーでは、名  
古屋造形大学ジュエリーデザインコースの学生たち  
が授業の中でデザイン・制作したLEDアクセサ  
リーを身につけてもらい、大いに盛り上がりまし  
た。

**高井** まさに学までが一体となる参加型のイベン  
トですね。





「NAGOYAアカリナイト」  
エシカル&フェアトレードファッションショー

伊藤 それだけではありません。パナソニック株式会社やロボベースにご協力いただき、小・中学生を対象にしたLED工作教室も開催しました。これはLEDのあかりの仕組みを学びながら、キットでランプや懐中電灯を作ってもらうのですが、本当にたくさんの子供たちが参加してくれました。また、もちの木広場をLEDのイルミネーションで飾ったりして、それはきれいなものでした。

高井 みんなで取り組むことによって、栄地区に活気が戻ってきそうですね。

伊藤 市民自らが愛着を持って、自分たちのまち、自分たちのテレビ塔と感じてもらえるように、愛着を育む仕掛けをつくっていかなければ、身近な存在になりません。ただのイベントと思われると間違いで、テレビ塔の再生だけでなく、もっと広義な意味では久屋大通界隈の発展、そして市民の意識や愛着を醸成しながら、久屋大通公園というハードの再開発につなげていく。その起爆剤とし

て「NAGOYAアカリナイト」はあると、そう捉えてもらった方がいいですね。

## 想いを持って継続すると 大きなムーブメントになる

高井 お話をもう少し広げて、中部には魅力的な資源がいろいろあるのに、それをうまく演出できていないとよく言われますが、どうすれば、行政も含めて楽しい演出ができるようになりますか。

伊藤 本当によく言われますね。いい種はいっぱいあるのに、それをうまく活かしていない。おそらく、今までは大企業や行政といった、大きなものに頼りがちだったのだと思います。楽しいまちづくりというのは、実は小さいことの積み重ねでしかできていかない。「NAGOYAアカリナイト」もそうですが、小さなことだけれど、継続することによって人が集まり、その活動が大きくなっていくと、それが一つのムーブメントになり、仲間が増え、コミュニティが生まれていきます。名古屋の良さを引き出すために大きな投資をする、あるいは行政が何かしてくれることを待つだけではなくて、私が主人公、私もまちづくりをする一員なんだと、自らが愛着を持って動いてもらいたいと思います。

高井 それは、がんばってやるのではなく、自分たちが楽しいと思えるようにやらないとだめなんですね。

伊藤 ええ。演出の仕方としてはそういうしつらえをしたいと思っています。

高井 最後になりましたが、先生の夢がありましたらお聞かせ下さい。

伊藤 夢は映画監督ですね（笑）。今は街を対象に演出をしていて、いろいろな法規制や予算、市民の意見を客観的にとりまとめ、事業やビジネスとして成果を出していかなければなりません。老後は、自らの想いを描く世界観を主観的に映画の中で表現したいと考えています。今はユーザーのため、目的のためにデザインするデザイナーですが、老後は自分の中からわき出る感性を自由に表

現するアーティストになりたいということでしょうか。

**高井** 今日、本当に楽しいお話でした。ありがとうございました。



## Profile

### 伊藤 孝紀 (いとう たかのり)

1974年三重県生まれ。1994年TYPE A/B（現：有限会社タイプ・エービー）設立。1997年、名城大学建築学科卒業。2007年、名古屋市立大学大学院博士後期課程満了。2007年より名古屋工業大学大学院 准教授・博士(芸術工学)。建築、インテリア、家具のデザインや市場分析からコンセプトを創造しデザインを活かしたブランド戦略を実践。行政・企業・市民を巻き込んだまちづくりに従事し、社会・世界に向け活発に活動中。

主な受賞

2008年 日本建築学会東海賞

2009年 中部建築賞

2011年 DDAディスプレイデザイン 協会特別賞

2013年 1月出版予定

「名古屋魂 Nagoya'n Souls ～まちづくりの提言書～」

伊藤孝紀編著 中部経済新聞社

「環境演出のデザイン作法 Smart Direction ～まちづくりへの13ワード～」

伊藤孝紀著 鹿島出版会

## ひと口メモ

瀕死の交通事故が転機となった伊藤先生の人生観。以来、いろんな想いを形にするための全力疾走が続いている感じです。

二十歳の時に決めた自分の「五原則」があって、それは①決断、②行動、③努力、④継続、⑤思い。今でもプロジェクトが停滞したり、困難に直面した時、この五つのなかで何が足りないかを考えます。すると必ずすべきことが見えてくるそうです。この「五原則」は、私も借用したくなりました。

「NAGOYAアカリナイト」や駐車場緑化、「なごやかさ」など、先生にはアイデアが次から次に湧いてくるように思えますが、泉を枯らさない秘訣は「止まらないこと」でした。そのエネルギーは名古屋の街への「思い」が強いから生まれてくるのでしょうか。実は熱い人なのです。

地域学に「歴史を背負わない都市は存在しない」という言葉があります。だから、今あるものを活かしたまちづくり、ができるのです。でも、これ

はライフデザインにもつながります。「自分は何者であるのか」、どんな歴史を背負っているのか、将来に向けて何を活かしていけばよいのか……街の演出家は、実は自分自身も演出しているのだと感じました。聞けば、自らボーカルとしてバンド活動もしているとのこと。そこでは主役を楽しんでいるのです。

街の演出家は住民一人ひとりを主役にしよう、あの手この手を考えていますから、われわれも街を楽しむ自己演出が必要だと、感じました。

.....

### 高井 一 (たかい はじめ)

東海テレビアナウンサー。1953年、京都府生まれ。同志社大学文学部新聞学科卒。1976年、東海テレビに入社。1997年、名古屋大学大学院多元数理科学研究科修了。現在、編成局アナウンス専門局長。

